合宿の夜の出来事

二十八期生　井出紀久子

一年の四月には十三名入部して、一見華やかにスタートしたのですが、人数が多かってことがかえって災して、毎日の出席者は六、七名。しかも、毎日メンバーが違うという有様で、教えられたことは次に出て来るまでにすっかり忘れてしまい、最初からやり直しという事もしばしば。クラブとしての団結もできぬままに合宿へ突入。この年の合宿参加者は三名。かく言う私も不参加。夏休みもおしつまると恒例の都立戦。一年生だけのチームを作ったのですが、その朝荻窪で待ち合わせて初めて顔を知った者同志でした。

こんな風に全てが半年遅れとなり、クラブ作りが始まったのは二学期になってからでした。誘い合ってみたのですが、当初の人数はとても集まらず、四、五人。記念祭が終わると先輩も毎日は出ることもなく、私達が教わったのは断片的なもの。バトンタッチされても独り立ち出来ず、ああしてみたりこうしてみたり。見るに見かねて瀬戸先輩が助け舟。塩出先輩、OBの吉田先輩、小堀先輩、小沢先輩、藤本先輩。ふがいない私達を何とかしようと教えに来て下さいました。

少しずつですが、クラブらしさが見えはじめ、団体戦の初勝利は春休みの富士高から招待試合のとき、富士のOGのチームから。それからは、何かがふっきれたように、一回戦で負け空虚な気持ちで帰ることがなくなりました。一年生を迎えた一学期は夢のように過ぎ、序々に力をつけ、一年二年が一つになって合宿。たった五日間がこんなに私達に力を与えてくれるものなのか、今でも不思議です。夏の都立戦では、表に出ることのなかった力まで引き出されたようでした。先輩方の助力、毎日の練習、そして合宿、クラブの和、幸運な組み合わせ、男子の力強い応援、全てが私達を勇気づけ、団体戦二位となることが出来ました。

○合宿第三夜の出来事○

夏の夜は暑く寝苦しいものです。軟庭と一緒に泊り込んだので、三十畳の部屋に三十二人も横になって暑さは倍増。出入口近くで、ふすまを開けて風を入れて寝ていました。これは一番廊下側に寝ていた人が翌朝話してくれたこと。

彼女が夜中にふと目をさますと、誰もいないはずの廊下に人影が。どうしても女性とは思えぬこの人が、肘枕に頭をのせ、横になってこちらを見ていました。恐さの為、声もたてずじっとしていますと、むっくりと起きあがり、今後はあぐらをかいてじっとしていました。そして、しばらくそうしていて、やがて階段を降りてゆきました。果してこの男が何者であったのか、誰の知る由もない。